
天地

ネットワーク テーブル 477号

天地シニアネットワーク 2018.

8. 17

TENTĪ TODAY 「残暑お見舞い申し上げます」		1
会員の広場	「北海道・旅の空（榎並佐知子）」 「最近の猛暑とゲリラ豪雨（渡海仁）」「絵葉書」	2
連載作品		5
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 52. レーザーとは何か	伊那 闊歩 5
随 想	随筆風「1950年代の僕と街」（15） テレビの時代（2）	臺 一郎 8
回 想	「住民運動・横浜新貨物線反対運動」（三）	宮崎 省吾 9
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（49） 洛中・六勝寺	大竹 漢洲 11
回 想	「思えば遠く来たもの」（3） 「広島カープが日本一になった昭和50年ころの広島」	津田 孚人 14
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」	16
事務局		17

TENTĪ TODAY

残暑お見舞い申し上げます

猛暑が続きますが、秋の気配も見えてきました。あと少し、なんとか無事に秋を迎えたいものです。一日一日を、大事に、注意していきましょう

8月15日の終戦記念日、戦争を知る人が少なくなり日本社会から風化しそうです。昨日、16日、定例の新三木会が如水会館でありました。テーマが「戦場と兵士 - アジアと・太平洋戦争期の日本」と、時宜にあったものだったから、200名位の出席がありました。冒頭、主催者から、身内、あるいは知り合いに戦争関係者、被害者がいる方、挙手をと求めたところ、20人もいませんでした。

今年も、戦争体験者の新しい証言が出ていますが、戦争を知らない次の世代にしっかりと伝えるのこさないといけません。

終戦当日のことは、これまで紹介されていますが、その翌日、8月16日に日本の社会がどのような反応をし、動いたかあまり知らされていません。手元に、大仏次郎の「敗戦日記」（草思社：1995年4月3日出版）があり

ましたので一部抜粋してみました。

・ラジオはこの際妄動して世界に信義を失ってはならぬと毎時繰り返している。

・大宮あたりの工場は工員解雇を始めたという。国民義勇隊を陣地構築に動員することも廃止。女子学徒の徴用もやめ、

・朝日新聞では女たちのやめたいものはやめさせる方針だと。男子行員も帰りがっている。作業は停止されている。

・東京でも、横浜でも米の特配があった。米軍にわたる前に分配し各戸に保有させるのだという話。

妄動を戒め、世界の信義を失ってはならないは、軍人向け放送と考えられます。前々日まで。空襲におびえ、我慢を強いられてきた一般国民は、素早く反応しているようです。戦争が、軍人のものであって、国民のもので無いというのがよくわかります。戦争への準備が始まっているようですが、一部の人のためであって、国民のためではない、との教訓をしっかりと覚えておく必要があります。

会員の広場

北海道 旅の空

榎並佐知子

1年以上前から計画して期待に胸躍らせながら8日間の北海道旅行へ友人2人と出かけたのは6月28日である。あいにくの曇り空、その上天気予報では1週間先まで雨との事で、正に暗雲立ち込める旅立ちだった。

東京から青森まで東北道を700キロ、雨が幸いしてか覆面パトカーにも捕まらず、途中事故渋滞もなく順調に9時間ほどでフェリー乗り場に到着、雨の日はお巡りさんも濡れながら切符を切るのは嫌なようで、スピードを出しても無事な事が多い。(但し、これは別に証拠がある訳ではないから雨の日に捕まったとしても責任は負いませんよ)

函館到着は夜10時過ぎ、ホテルに着いて何よりびっくりしたのは中国人だらけと言う事で、これは旅行中ずっと続く事になる。私は人種的偏見をあまり持たないが、彼らの傍目も構わない大声での会話(何言ってるのか分からない)、ラウンジの椅子を占領する態度の大きさ、トイレなどでのマナーの悪さには辟易であった。中国人は家族連れが多く、当然子供も一緒に旅行しているのでこう言う親の態度を見ながら育って行くのかと思うと中国13億人のマナーを正すのは容易でないと悲観するばかりである。

翌朝はガイドブックに従って朝市のお勧め食堂へ朝ごはんを食べに行く。

おいしい事はおいしかったが、ガイドブックに載っているようなお店はボッタくりになるのか、丼の具(ウニやイクラ)が少ししか乗っていないと友人はぼやく。他のお店も当たれば良かったかも知れない。

そば降る雨の五稜郭は騒がしい中国人さえいなければ、歴史を感じ、イケメン土方歳三に思いを馳せる絶好の機会であったと思うのだが、いかんせん、人ごみで押し

合いへし合いの見学になってしまった。ランチは五島軒、明治12年創業の言わずと知れたフランス料理の老舗である。帰って来てからテレビで「五島軒ではボルシチ」と言うのを見て食べそこなったら後悔のほぞを噛んだ。

赤レンガ倉庫、異国情緒豊かな教会などを見学の後、霧雨の中、函館山頂上のレストランで夕食、百万ドルの夜景は諦めていたもののロプウェイで到着した時に回りが真っ白だったのにはがっかり。ところがところがだ、デザートに移る頃なんと霧が晴れて来たではないか。おかげで短い時間ではあったがきれいな夜景を見る事が出来た。日頃の良い行いへのご褒美でもあろうか。

翌日は大沼公園へ、雨は降っていなかったが残念ながら駒ヶ岳の姿はすっかり雲の中。旬のジュンサイそばがなかなかイケたのがせめてもの慰めだった。

この日の宿は小さいながら知る人ぞ知る岩内の高島旅館。ちょうどアワビがたくさん採れた由で夕食はアワビ尽くし、その他にもうまい海鮮がいっぱい出てこれで1万7千円はお得感満載である。因みにこの旅館は半年前に予約しないと宿泊出来ないらしい。

積丹半島をぐるりと回って実は「シャコタンブルー」と言われる日本海の青い海を見るのが今回の旅行の眼目の一つだったのだが、あいにくの雨と風で神威岬は突端まで行く道が通行止めになっていた。垣間見える海は灰色である。泣く泣く小樽へ。小樽は雨にも拘わらず休日の原宿のように混んでいて（勿論大半が中国人）、お菓子やガラス製品を買って歩きまわって疲れただけ、と言う散々な結果に終わってしまった。

しかし、この日は札幌で泊まったのだが、同行の友人（道産子）の弟さんが手配してくれた料理屋で念願の毛ガニを堪能出来たのでまあ良しとするか、と言う1日であった。

翌日は旭川へ、もちろん旭山動物園へ行って傘をさしながらトラやペンギンやレッサーパンダのモグモグタイムを楽しみ、夜はジンギスカンと言う塩梅。

翌早朝、大雨の影響で非難準備情報がスマホに鳴り響いた時には仰天した事、甚だし。但し、結局大した事はなかったようで無事に美瑛に辿り着けたのは幸運であった。しかし途中の川は相当増水していた。

美瑛は少し季節が早すぎたためか、パッチワークの丘も花は殆どなく野菜畑の緑が連なっているだけで残念至極だった。その上、ここもまた雨で、仕方がないのでお店で休みながら「じゃがバター」「焼きとうきび」などなど味わいながら暗い空を眺めてため息をついていた。ケンとメリーの木、セブンスターの木、親子の木など興味深く見て来たが、これらの木々も維持して行くには苦労が多いらしく、かなり伐採もしているとの事、有名になるほど大変なものだと現地の人々に感謝したものだ。

富良野でも同じく大雨に見舞われたが、ラベンダーはたくさん咲いていて多少溜飲を下げた感あり、ちょうど季節でおいしいメロンばかりを食べていた。

最終日は苫小牧からフェリーで大洗へ帰る予定で、雨の中北海道に別れを告げたのだが、低気圧が来ているとの事で船は大揺れ、友人の一人が船酔いで遂にダウン、19時間の船旅は酔わないまでもかなり辛いものだった。

全走行距離1800キロ、自分の年齢（69歳）を考えるとよくも一人で全行程運転出来たものだと我ながら感心しつつ、免許証返納はまだ先の話だと一人合点している次第である。

雨でなかったらと思いつつ、でもおいしいものには恵まれたな～と次の北海道旅行に夢を馳せる今日この頃です。

最近の猛暑とゲリラ豪雨 渡海 仁

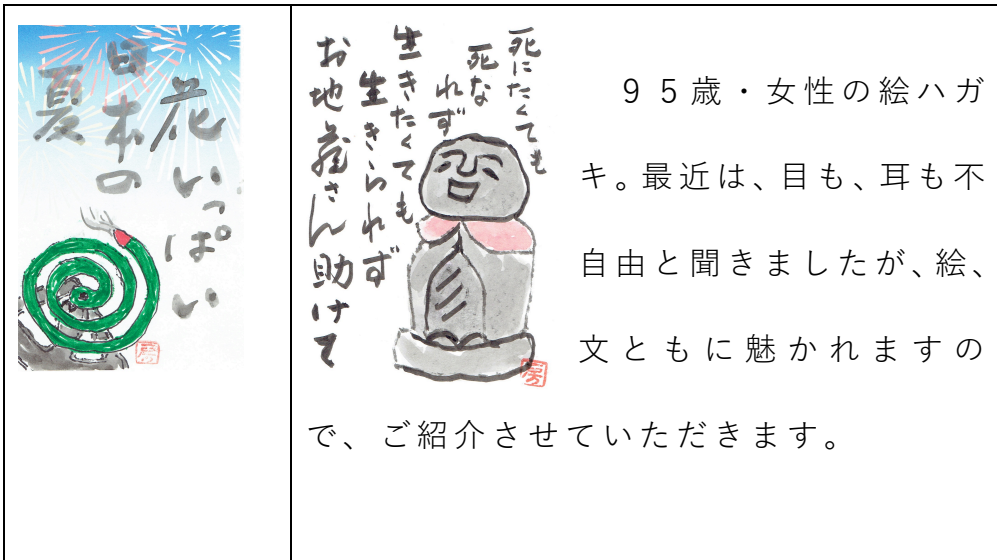
このところ日本各地で最高気温が 35℃を超える猛暑日が続いている。夏の最高気温では全国的にも定評のある埼玉県の熊谷市は、7月23日に 41℃を超える最高気温を記録した。岐阜県の大垣市も夏になると高温を記録する都市だが、7月の19日に 40.7℃の最高気温を記録した。そのほか群馬県の館林市、京都府の京都市、山梨県の甲府市なども最高気温が 39℃を記録した。東京や大阪もこの夏は8月の半ばまでに 35℃を越える猛暑日が大阪では 22回、東京でも 8回あり、このうち 37℃を越える日も東京で 2回、大阪市では 5回もあった。これほどの最高気温になると、暑さに凶暴さや悪意を感じてしまう。

こうした夏の暑さを今から 40年前の 1970年代の半ば頃、例えば 1976年や 1977年と比べてみる。40年前に全国で最高気温が 34℃を超えた地点は、1975年は 1ヶ所、1976年と 77年は 1ヶ所も無かったというから、この 40年間で日本の夏は確実に暑くなったと言えるだろう。

そうかと思うと、台風が近づいて大気の状態が不安定化したりすると、突然 1時間に 100mm を超えるような猛烈な雨が降る、いわゆるゲリラ豪雨に襲われる都市や地区も確実に増えている。テレビ報道によると、今年全国で 1時間に 100mm を超える猛烈な雨が降った回数は既に 13回に達し、その半数近くが 1時間に 120mm を超えるそうだ。気象庁では 1時間に 50mm を超える雨を「非常に激しい雨」と言う。いわゆるバケツをひっくり返したような雨だ。これが 100ミリを超えると、人はしばしば恐怖すら感じるらしい。また、雨量が 1時間に 50mm をこえると、雨水排水に関する都市下水路の設計限界を超えてしまう。結果道路は冠水し、建物の浸水騒ぎも起きやすくなる。

こうした猛暑やゲリラ豪雨の主たる原因は地球温暖化にあるらしい。そして地球温暖化の主たる原因については、化石燃料に依存した人間の物質文明的な活動で二酸化炭素が増えたからだといわれ、決め付ける人が少なからずいる。特に欧米の一部のインテリにこうした現代文明主犯説を主張する人が多いようだ。でも人類が誕生するはるか以前から、地球は寒冷化と温暖化を繰り返してきた訳だから、自分は化石燃料に依存した物質文明がもたらした地球温暖化の主たる犯人だとは必ずしも思えない。皆さんはどう思われますか？

それにしても、猛暑の日に差すと、傘の裏側は 10度位低い冷気に包まれるハイテク日傘みたいなものを誰か発明してくれないだろうか？



95歳・女性の絵ハガキ。最近、目も、耳も不自由と聞きましたが、絵、文ともに魅かれますので、ご紹介させていただきます。

連載

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

52. レーザーとは何か

いつごろからのことであつたらうか、若者たちが集まるコンサートや人気あるライブなどで、会場の空間を切り裂くグリーンの光線が音楽に合わせて忙しく飛び交っているのをよく見かけるようになった。筆者がそこに居あわせたわけではないが、テレビなどで見ると、その喧騒にグリーン（レッドやブルーも）の一直線にのびる鋭い光線がかっこよく似合っているようで、ライブ演出の定番になった。このグリーンの光線こそ今回話題とするレーザー（光線）なのだ。

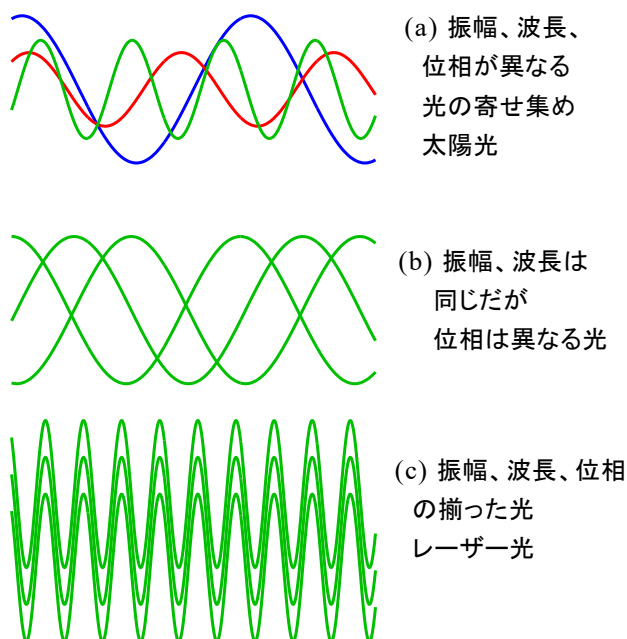
レーザー（Laser）とは **Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation** の各単語の頭文字をとって、1958年、米国の若い物理学者ゴードン・グールドが命名したもので、日本語には「誘導放出によって光を増幅すること」と訳されて、光を増幅する技術を意味するが、ここではその装置とそれによって発せられたレーザー光をもレーザーということにする（*1）。コンサートなどの他に最近では講演会でスクリーンに映し出された映像を指し示すために演者がレーザー・ポインターを使うことが多くなった。この他に測量機器や兵器などの照準器として、またレーザー・プリンターや音楽を録音したコンパクト・ディスク、DVD、BDなどの光ピックアップとして、レーザーを利用する機器はますます増えつつある。

この便利そうに見えるレーザーとはどんなものであろうか。fig.1 (a)にはそれぞれ振幅、波長、位相の異なる光の波が示されている。これらが混合し

たものが太陽の光で、全体として白っぽく見える。太陽光には可視光のほかに紫外線や赤外線など人の眼に見えない光が含まれている。(b)に示す3つの波は振幅と波長は同じであるが、お互いに位相(位置)が異なるために全部あわせるとグリーン色の強弱ができる。(c)は振幅、波長、位相がぴったり合った光で、この3つの波はピッタリ重なるので上下にすこしずらして示してある。レーザー光は「単色光」つまり、ただ1種類の波長しか含まない光(電磁波)である。プリズムを通して7色に分解することなく同じレーザー光が出てくるだけのことである。たとえば、He-Ne(ヘリウム-ネオン)レーザーの場合、グリーンのレーザー光の波長は543.5(nm = ナノメートル)、イエローの波長は594.1 nm, レッドの波長は632.8 nm である(可視光の波長は380 nm~780 nm)。

このレーザーの波長は媒質(気体、液体、個体)の種類によって異なる。

fig.1



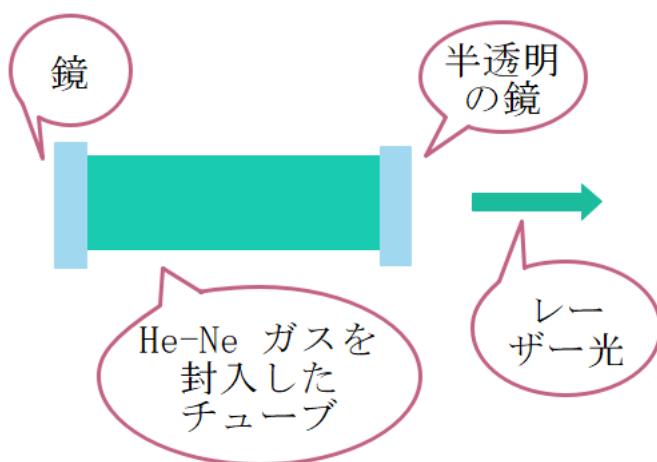
レーザー光は細い直進する光線として取り出すことができ、拡散することがほとんどないので光を細く絞って遠方まで届かせることができる。凸レンズを通せばすべてのレーザー光がレンズの焦点にあつまる。単色光なので色収差(色によって焦点距離がちがうこと)がなく、レーザー光は焦点に集中してぼやけることがない。光の波長程度まで焦点を絞れるのだ。ものすごい電磁エネルギーを1点に集中させることができるため、そこに置かれた金属もピンポイントで瞬時に溶かすこともできる。これらの特質を利用して、商品名やロゴなどを小さくはつきりと金属板に印字し、また細かい集積回路の基盤の加工などがなされている。エキシマレーザーは、アルゴンとフッ素の混合気体から発生する紫外線レーザー(波長193nm)であるが、これは眼科用として使用されている。

レーザー装置の開発者は大勢いるが、そもそもレーザーの原理を発見したのは、あの偉大な物理学者アルバート・アインシュタイン(1879-1955)なのだ。アインシュタインは「光量子理論」(相対性理論ではなく)によってノーベル賞を受賞したが、1917年、かれは原子核のまわりで運動する電子による光量子(*2)のやりとりを研究中「誘導放射」現象の可能性に気がついたらしい。この光の誘導放射の理論がレーザーの原理を与えることとなったのである。

誘導放射(放出)の仕組みを調べるためには、またすこし原子の内部に入りこまなければならない。第28回で行ったように原子ひとつを集合住宅(マンション)になぞらえ、原子核のまわりを運動する電子たちをその住人にたとえて考えよう。そこで、住人に強い光を照射(これを光ポンピング(*3)という)して光の粒(光量子=光のエネルギーの塊)を与える。住人は光量子をひとつ持ったままマンションの屋上に放り上げられる。屋上は不安定で居心地が悪いため、住人はもとの部屋に戻ろうとして与えられた光量子を手放したいのだ。光量子をもらっても電子にとっては何のメリットもなく迷惑このうえない代物なのだ。そこに、たまたま自由な光量子が通過すると、屋上の住人は不思議なことに持っている光量子を、通過してゆく光量子と寸分違わぬものに造りかえて放出する。住人はもとの部屋に戻ると同時に光量子のクローン(*4)ができる。自由になった光量子はマンションの屋上の住人を次々に襲い、そこに居た住人から自分とまったく同じ光量子を奪い解放する。光量子のクローンはどんどん増える。倍々に増えるのであるから、その増加率は半端ではない。誘導放射が継続的に起こるためには、屋上の住人が多くなければならぬ(これを反転分布(*5)という)。このようなメカニズムが可能であり、こうしてレーザー光をつくり出すことができるであろうことをアインシュタインは予言したのである。

では、レーザー発振装置として代表的なもののひとつ、He-Ne(ヘリウム-ネオン)ガス・レーザーの仕組みについて調べてみよう。

fig.2 ヘリウム-ネオン ガス レーザー



まず、ガラスチューブ(単3乾電池ほどの大きさ)の中に、ヘリウム(85%以上)とネオン(15%以下)ガスを封じ込める。これに高い電圧をかけて放電させガスを刺激(ポンピング)する。図にはポンピング部分が省かれている。ここまでは通常のネオンランプと同じであるが、ヘリウムが忙しく働いてネオンの反転分布を促し、ネオン光量子のクローンが増えてゆく。光の色がグリー

ンになるかイエローかあるいはレッドになるかは技術的な問題である。光のクローンをさらに増やすためにガラスチューブの両端に反射鏡を置いて、チューブ内のクローンの密度をあげ、チューブ内にレーザー光の定在波をつくり出す。チューブの両端の鏡の一方を半透明にしておき、満を持してそこからレーザーの光束をとりだすのだ。レーザー・ポインターのあの赤い光は、He-Ne レーザーが発する色である。

レーザー実用化の歴史は、米国カリフォルニア-ヒューズ研究所の研究者セオドア・H・メイマンがルビーを媒質としたルビー・レーザーの赤い光(波長 694nm)を発振させることに成功した時から始まった。個体レーザーにかんしては、その後イットリウム、アルミニウムの酸化物(ガーネット)を媒質とする YAG が開発され、これにネオジムまたはエルビウムを添加した Nd:YAG や Er:YAG などが盛んに使われている。とくにクロム、ツリウム、ホルミウムを添加(ドーブという)した Cr:YAG は胆石除去など医療用として使われている(*6)。

最近では、半導体を用いた半導体レーザー(レーザー・ダイオード)装置が多く使われるようになってきた。ふたりの日本人物理学者、西澤潤一と渡辺寧によって発見されたアイデアが実を結んだもので、ダイオード(1方向だけに電流を通す回路素子)の間にインジウム、ガリウム、ヒ素、リンからなる結晶をはさみこみ電流によってポンピングを行い、レーザーを発振させるのだ。

半導体レーザーの性能はまさに驚異的である。まず、非常に小型化できる、レーザー・チップはなんと 0.3×0.3 mm 角。したがって少ない電力で作動する。乾電池 2 本もあれば十分なのである。たいへん丈夫で、100 万時間以上長持ちし、しかも安価なのである。コンパクト・ディスクのピックアップ用はわずか数十円で入手できるらしい。

レーザー技術はナノ技術とともに更なる発展が期待される。

(*1) レーザーに似たものに「メーザー」があるが、それはマイクロウエーブの増幅だけに限定した装置である。LASER の L を M(icrowave) に変えたものがメーザーである。レーザーよりも開発が早かったもののいまやレーザーが主役である。またレーザーと発音が似て、よく混同されるものに「レーダー」がある。レーダーは「電波探知機」と訳されているように、電波(マイクロ波)を(パラボラ)アンテナから発し、遠方にある物体にあたって帰ってくる電波の方向や距離などを探知して物体の位置や大きさを知る装置である。第 2 次大戦中、英国空軍によって実用化されドイツから飛来する飛行機の位置を探知し、ドイツ空軍に多大な損害を与えたという。日本軍もあわててレーダーの開発を始めたが実用化されることはなかった。戦後、レーダー技術は発展し、われわれは台風情報など高性能気象レーダーのお蔭に与かっている。なお、魚群探知機という装置があるが、それは電波ではなく音波(超音波)を使っているのだ。

(*2) 電磁波は波であるが、原子、原子核、電子サイズのマイクロな世界では、粒子としての性質が顕著になってくる。光はエネルギーを担った粒子として扱うことができる、この光の粒を光量子という。

(*3) ポンピングの方法は、ルビーのような個体レーザーには強い光をあてる、半導体レーザーの場合は電流を流すなど色々あり、ゴードン・グールドによって開発された。

(*4) 光は電磁波で、振幅、振動数（波長）、位相（位置）によって特徴づけられる。レーザーはこれらの要素と進行方向がすべて揃った光の束である。

(*5) 反転分布とは、部屋に居て安定な状態よりも屋上の不安定な状態にある住人のほうが多い状態を意味する。

(*6) 聞いたこともないような気土類元素が、レーザー技術に役立っている。これらが有効であることを突き止める研究者の地道な研究と執念にはいつも驚かされ、畏敬の念を禁じ得ない。

随筆風「1950年代の僕と街」(15)

臺 一郎

テレビの時代（その2）

昭和30年代の半ば近く、中学校生になっていた僕は、まるでテレビ中毒やテレビ依存症のように夢中でテレビを観た。わが家にテレビが来た頃の放送は、例えば朝2時間、昼3時間、夜5時間だけ放送して、それ以外は放送を休むというような状態だった。録画の技術がなく全て生放送だったことや、当時の日本の放送局には1年365日、朝から夜中まで切れ目なく生放送を続けるだけの番組制作力や人材がなかったのかもしれない。

また、朝、昼、夜の放送が始まる前後の15分から30分位は、家庭のテレビ受像機の画面のゆがみを確認する、或いは補正するための画像としてテストパターンが放送された。テレビ画面の真ん中に、円形の幾何学的な模様か静止画で映し出されるだけの放送だ。テレビがわが家に来た頃の僕は、テレビ放送が珍しくて、面白くもなんともないそのテストパターンを良く終わるまで観た。

テレビに夢中になったのはなにも僕だけではない。好奇心が旺盛になる同年代の全国の子供達は皆そうだった。テレビには確かにそういう魅力というか麻薬的な力があった。そのため、世間の親達の中には、子供がテレビに夢中になることに問題意識や危機感を抱き、テレビを観せる時間に制限を設けるとか、テレビを見すぎないように子供に口やかましく言う親が少なからずいた。わが家もそうだった。テレビの視聴時間を制限しようとする母と僕はよく口論をした。僕が中学1年生の頃、母はいくら言ってもテレビを観るのを止めない僕に頭にきて、ついに実力行使に出た。母はなんとテレビ受像機の裏側のカバーを開けて、中から真空管を抜いてしまったのだ。それをされると、電源を入れても画面は何も映らない。僕は悔しくて何回か、そうされるうちに対抗策を考えた。それは、母が真空管を抜いたら、お返しに僕もテレビの裏側から別の真空管を抜くという策であった。実は母だって観たいテレ

び番組があった。でも、自分が抜いた真空管を戻しただけではテレビは映らない。僕の抜いた分も戻さないと観る事が出来ないからだ。こうして母の真空管引き抜き作戦はその実行を抑止され、効力を失った。戦争反対を叫ぶだけでは、戦争は抑止出来ないのと同じだ。

僕の親友の一人は、家でいくらテレビを観ても、父親の見たいプロ野球の中継番組などかぶらない限り、母親は何も言わないという実に羨ましい家庭環境だった。それをいいことに、彼はチャンネルを次々と変えては好きな番組を見まくった。僕はそんな彼が羨ましくて羨ましくてしようがなかった。

ちなみに、その友人は大人になると、全くと言って良いほどテレビを観ない人間になってしまった。そんなものなのだ。

今、孫達を見てると、ゲーム機やスマホでのゲームに夢中になり、母親からゲームばかりやってないで勉強しなさいとか、早く宿題をやりなさいなどとよく叱られている。

僕の頭には、『あー歴史は繰り返す』という言葉が浮かんでくる。

「住民運動・横浜新貨物線反対運動」(三) 宮崎 省吾

「公共」の住民襲撃に抗して

この事態を乗り切るには法的強制力＝暴力が必要だが、そのための方便として使われたのが「公害対策」(現在の用語は環境対策)と「反対勢力の抹殺」である。ここでもまた、くわしい経過を省略せざるをえないが、1972年横浜市と国鉄は7項目の「公害防止協定」をむすび、同時に国鉄は「反対同盟は解体したものと見做す」という最後通牒(三下り半)を發した。これをもって横浜市は、貨物線問題は「基本的に解決」したとし、土地収用法による申請書類の縦覧に踏み切った。われわれはこれを「三行り半・七項目体制」と命名、その打破に向けて全力を挙げることになった。

やや詳しくなるので恐縮だが、この「公害防止協定」(環境アセス)路線は、体制側の住民運動対策の基本をなす方法であり、その内容と狙う効果などを具体的に明らかにしていく必要がある。

第一に、「七項目協定」に即して言えば、規制値そのものが努力目標となっていて強制力を持ってないことをまず上げなければならない。騒音、振動、日照、緩衝地帯などに対してそれぞれ数値が列挙されているが、それらは全て「目標値とされたい」、「設置されたい」と表現されており、国鉄はそれを「努力目標といたします」という線を一步も譲っていない。中身は何もないというしかない。

これを裏側から実証するのが、例えば協定が謳う夜間の貨物列車のスピードを時速50キロにする制限である。もし上述の「規制値」に強制力(拘束力)を持たせようとするれば、騒音55ホン、振動毎秒0.3ミリなどとするれば済む筈である。それが不十分なことを補強するために、一見多方面からの規制であるかのような「見せかけ」である。時速50キロなら騒音は55ホン、振動は0.3ミリ以下になるという保証は何もない。

こうして「七項目協定」は、公害「防止」の効果を、名目上も全く持っていない。しかし一般には起業者と自治体の間の「公害防止協定」には遵守すべき規制値が設定されているのが普通である。勿論自治体が「公害対策路線」をとるのは、反対運動を押さえ込み、もしくは回避するためのものであるし、規制値の設定に対しても「責任ある行政」として技術的に達成可能な範囲を超えることはないから、始めから、住民や農民、漁民にとって具体的にどの数値なら影響があるのかないのかといった観点は存在しない。「受忍限度」といったものを勝手に設定し、「公共の福祉」のための「滅私奉公」が強制される。しかも一見拘束力を持つかに見える規制値も、破られても被害者たる住民が何も出来ないのが、「公害防止協定」の実態である。

札幌地裁は、北海道電力と伊達市の伊達火力発電所建設に関する「公害防止協定」についての住民の権利について以下のように判断している。

「公害防止協定に基づいて地方公共団体が取得する権利は、当該地方公共団体に専属し、他に譲渡することもできないし、行政主体でない他の法主体が代わって行使することもできない性質のものであると解する」（中略）「住民は、当該地方公共団体に属しているということのみをもって、当然に、公害防止協定に基づいて地方公共団体が有している権利をみずから代位行使しうる地位にあるとはいえない」（中略）（従って住民が）「伊達市及び伊達漁協に代位してする請求は、当事者適格を欠くものであり、不適法といわなければならない」（伊達火力発電所建設等差止請求訴訟第一審判決、1980・10・14）。

完全な門前払いである。「公害防止協定」が守られなかった場合、つまり規制値が破られた場合、住民が自らの被害を「公害防止協定」違反に求める法的権利がないことを宣言している。「公害防止協定」が、誰のために、何を目的にするものかがはっきりする。前述したように、「公害防止協定」は、“反対する住民を押さえ込むことを主たる目的にしたものであるから、起業者も自治体も規制を守る意思など持っていないのが普通である。従って、規制値の測定などが記載されていても、ただやっているだけのものになっている。

もう一つ指摘しなければならないのは、この「公害防止協定」が謳う「緩衝地帯」である。具体的には、貨物線の地上部分の両側のそれぞれ10メートルを新たに買収し、空き地にして公害の波及を減少させるというものである。一見もっともものようであるが、これは貨物線の至近距離の地帯が住民の生活が出来ないものであることを自ら認めたことに他ならない。そうでなければ「緩衝地帯」などという発想が出てくるわけがない。だとするとこれは明治以来の近代日本の行政がとってきた「公害対策」の基本的パターンの繰り返しに過ぎない。

明治中期、足尾銅山の鉍毒に苦しむ谷中村農民が大規模な抗議運動を起こすと、これを徹底的に弾圧すると共に、土地収用法を使って谷中村自体を廃村にして住民を強制排除し、跡地を巨大な沈殿池にして鉍毒問題の「解決」としたのである。戦後も四日市コンビナートなどに、後から「緩衝緑地」が制度化されている。三里塚でも「騒音地帯」が設定されいくつかの集落が無人化され、壊死した風景になっている。この方法の基本的特徴は、公害の発生源をそのままにして問題を被害者側に転嫁し、強制排除することによって

「解決」とすることにある。

言うまでもなく、これは加害者救済そのものである。と同時に日本の公害行政が「公害防止」を標榜することによって、実は被害(者)(地域)の存在そのものを無視・抹殺することによって不可視化することだけを目的とすることを示している。

国鉄と「公害防止協定」を結んだ横浜市は、当事者としての責任上、依然として続く反対運動に対してますます強硬な攻撃を加えていくことになる。単なる無視/黙殺ではなく、市長に抗議し、面会を要求する住民に対して機動隊を使って排除し、特別の市広報紙を79万部印刷し、通常の町内会などを通じての配布ではなく、新聞販売店を使っての各戸配布をした。その狂態ぶりは半端ではない。

1974年市長は、国鉄の土地収用のための土地物件調書に署名押印を拒否した地権者の「代理署名」を行って、住民を国鉄に売り渡した。国鉄はこれによって土地物件の強制収用の条件の全てをクリアした。反対同盟は市役所内で抗議集会を行い、飛鳥田革新市政との訣別を宣言、横浜市から分離・独立し、住民による、住民のための、住民の自治体を目指すことを明らかにした。(つづく)

<そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (49)

大竹漢洲

洛中の春8・六勝寺

岡崎疏水に架かる慶流橋から東山の方角を眺めています。疏水の両岸には桜樹が続き、大きな枝が水面まで垂れ、枝々には華麗な桜花が咲き誇り、春爛漫の景色です。疏水には大勢の客を乗せた十石船が、大きな歓声と波紋を残して、橋を潜り抜けていきます。

この地域は、現在京都では岡崎文化ゾーンと言われ、美術館・図書館・動物園・京都会館・岡崎公園が緑地に建ち並んでいます。この大きな区画地の北側が、広大な神域のある「平安神宮」です。「平安神宮」の造営は明治28年(1895年)であり、「インクライン」の第1期竣工は平安神宮より早く明治23年で、南禅寺船溜まりから流れる岡崎疏水は、その1年後に完成しています。

平安時代には鴨川から東で東山までの地域は「白川」と呼ばれ天狗が住むと言われるような寂しい場所でした。鴨川を越えて寂れていた「白川」の地にまで、平安京内の街区の道路が延長され、坊城に似た地割がなされていました。平安時代末期を迎えて、末法思想が蔓延するなかで、隠然とした権力の持主であった後白河天皇(上皇)と歴代の天皇がここ「白川」に、白河院政の少し前から始めて50年をかけ御願寺として「六勝寺」を建立されました。今日、岡崎文化ゾーンには寺院跡の石碑が建てられ、寺院跡を確認することができます。現在建物が建っている敷地から判断すると「六勝寺」の規模が想像できて、当時の朝廷が掌握していた権力の大きさに驚かされます。

「六勝寺」の中で、最初に建てられた寺院が「法勝寺」でした。白河天皇(上皇)の御願寺です。かつて白川の土地は、平安京に於いても権力を維持し続け

た藤原一族の私有地でした。この「法勝寺」を私有していた左大臣藤原師実が寄進した土地です。「法勝寺」が建立していた処は、京都市動物園とその北接する一帯です。今日まで「法勝寺町」の地名が残っています。東南にあった池島の上には巨大な「八角九重の仏塔」が建てられていました。

「法勝寺」は、高さ三丈二尺の鍍金された毘盧遮那仏をご本尊とする金堂を囲んで、九体阿弥陀仏を安置した阿弥陀堂、講堂、五大堂、法華堂などが配置された伽藍で、大寺院の風貌が想像されます。「八角九重の大塔」は東の山科盆地からの粟田口を超えて都に入る人びとが、最初に目にする建物です。

八角形は古来から皇帝の儀礼に深く関わりのある形状でした。天皇の玉座は八角形の黒漆屋形(高御座)です。高御座の八角形は、天皇が統治する八方の国土を象徴するものでした。九重(きゆうちょう)が皇居や宮中を意味していたとすれば、この期に王家の創出と王権強化を示そうとしたことに他なりません。

「尊勝寺」は白川上皇が院政を開始した後の堀川天皇の御願寺で、京都会館の東側に跡地があります。「最勝寺」は鳥羽天皇の御願寺で「法勝寺」と「尊勝寺」の間に位置していました。跡地は平安神宮の南で、府立図書館の建物のある地域です。「円勝寺」は鳥羽天皇の皇后待賢門院(藤原璋子)の御願寺です。ご本尊に大日如来が安置されていました。境内跡は京都市美術館。「延勝寺」は近衛天皇の御願寺です。東大路が二条通を横切る南辺りが跡地にあたります。そして、最後の一寺である「成勝寺」は六勝寺のなかで特異な、性格を持った寺院です。「保元の乱」で敗れて、隠岐に流罪されて亡くなった崇徳天皇の御願寺で、規模が一番小さいと伝えられています。京都市勧業館あたりが、寺院跡地になります。崇徳院の恨みは大変なものでした。怨霊に化して復讐の鬼となります。御所には恐れ慄き崇徳院の霊を鎮めるために、追諡・御陵を追築しています。以後も崇徳院の怨霊は治まるとなく「大天狗」と化して祟り続けました。崇徳院の諡の「崇」の”音読み“も意味があります。崇徳院の心情を理解でき、尊崇しています。

「保元の乱」はNHK大河ドラマ「平清盛」を見ていた方はご存知のことと思います。鳥羽天皇の長子、崇徳上皇出生時のわだかまりが遠因となり、皇子重仁親王の皇位継承権の喪失を意味する後白河天皇の即位など、崇徳の鳥羽・後白河に対する怒りが背景にあります。「保元の乱」の戦場になった場所が、白河上皇の院政の政庁であった「白河殿」でした。「白河殿」の北殿を後白河天皇方の軍勢は、平清盛・源義朝・原義康との三軍に分かれて、鴨川を渡り、白河北殿を急襲して、崇徳上皇方の敗戦が決しました。その後大きな政治的転換となった武士政権の誕生の地が、ここ「白川」でした。

この地域で院政が執り行われた政庁「白河殿」、並びに「六勝寺」が立ち並んだ風景を想像するだけでも壮観です。これらの寺院群は、白河院政を象徴する大事業でした。造営や造仏に要した費用は裕福な受領層(任国に赴任した国司の最上席者)によって調達、寄進されました。ほかに白河院の御所である「白河泉殿」(南殿)、白河北殿があり、この院に蓮華蔵院・法莊殿院と言う寺院が付属しており、御所と御堂とが一組になっていました。後の鳥羽上皇でも同様でした。

過去の歴史を振り返って見ても、天皇が権力を握った時代は、決して長く

はありません。平城京を造営した聖武天皇は、律令国家建設を目標にした国造りを行い、平安京に遷都した桓武天皇は、新しい政治改革と蝦夷平定を行い、国家安定を計りました。然し、院政期は白河上皇から開始されましたが、基本的な政治形態の違いは、藤原氏の摂関政治からの脱却と台頭した武家社会の重用でした。

一方で上皇に権力が集中したことによる政治的な弊害が起こり、院政期に起こった大乱「保元の乱」と「平治の乱」を境にして、王朝政権から武家政権に支配権は移り、朝廷は凋落の一途を辿り、飾り物としての意味しか持たなくなり、遂に鎌倉幕府から幕末まで武家政権が続くこととなります。

明治維新になり新憲法が發布されて、天皇が「統帥権」を握り権力の頂点に立ちました。白河上皇以来の出来事です。増長した長州や薩摩の官僚や軍属たちが、「統帥権」を乱用して、日清・日露を皮切りに先の日米大戦に突き進んでいきました。今年が戦後70年。天皇は象徴であることこそ平和です。

「白河北澱」を拠点にして戦った崇徳院は、「保元の乱」に敗れ、その怨霊として崇った土地に建てられた壮大な建物・寺院仏閣は、元暦2年（1185年）の大地震で、「法勝寺」の八角九重塔が大破したのを始め「六勝寺」など全ての寺院は甚大な被害を受けました。源平内乱の直後であったこともあり、京都への租税・年貢が滞って、寺院の再建も当然のことに後回しにされました。

被害の少なかった「六勝寺」の寺院もその後の「応仁の乱」でことごとく焼滅して、以後再建は成されませんでした。この、惨事も大天狗の祟りとして京雀は囁いていました。白川の地は、再び庶民が暮らす静かな土地に戻りました。

鴨長明は「方丈記」で、“無情の世における人と住処の儂さ”を書いています。この院政期に大きな災難が起こっています。正に末法の世界でした。安元3年（1177年）の大火、治承4年（1180年）の辻風（竜巻）、同年の福原遷都、養和年間（1181-82年）の飢饉、元暦2年の大地震でした。世の中の人々は平家一門が海の藻屑と消え、平清盛が海に棲む海龍と化して崇ったとの、京雀の噂がたちました。

13世紀に編纂された歴史書に依ると、ここの跡地は「岡崎」と呼ばれ広大な畑地であったと記録されています。京都の街は幕末の騒乱や東京への遷都により衰退を免れませんでした。「インクライン」と「水力発電所」が完成を機に、京都は内国勸業博覧会、即ち産業博覧会を開催して工業都市の発展と、平安遷都1100年記念祭で京都の文化度とを内外に訴える催物が開催されました。開催会場に選ばれたのが、現在の「岡崎文化センター」と呼ばれている地域でした。明治以降、京都市内で一番変革した地域が岡崎です。

周辺一帯では疏水を契機に、新都市開発も計画的に進められて、東山山麓では風致保全と合わせた別荘開発も進み、また疏水の水を利用して庭園も多く作られました。

春、桜の満開の時に神宮道に架かる「慶流橋」の欄干に立っています。疏水上流を臨み「六勝寺」の在りし日の姿を想像しています。南禅寺溜から先の「広道橋」左岸は、白河上皇の御願寺「法勝寺」が建立されていた処です。

疏水の傍に「八角九重の大塔」が立っていたとは想像できません。「広道橋」から「慶流橋」の左岸には「円勝寺」が建てられていました。広大な境内で想像の枠を超えています。左岸の縁に沿って、南禅寺溜から堀川端まで岡崎疏水に沿うように、約2 Kmの桜や柳の下陰に小径が通じています。「六勝寺の小径」と呼ばれ、格好の散歩道です。

「六勝寺」で道草をしました。平安神宮の27 mもある大鳥居をくぐって参道を歩き始めました。

“思えば遠くへ来たもの” (3)

津田孚人

広島カーブが日本一になった昭和50年ころの広島

前回(476号)小見出しを「広島カーブが日本一になった1950年ころの広島」としたのですが、「1950年」は、「昭和50年」の間違いでした。直ぐにミスミスと気付かないことが多くなり、順調に加齢を重ねていると納得するのですが、いささかショックを受けています。

昭和40年代の終盤にオイルショックが始まりました。原油の価格が1バレル2ドル台だったのが一気に2桁台になり、ガソリン、電力・ガスなどのエネルギーコスト、石化製品の原料コストが大幅にアップしました。広島の企業もどこへいってもその話でもちきりだったはずですが、広島は、自動車造船、重機などの重工業と、その関連会社で持っていましたから、影響は大です。地場企業は中央の情報を求めていました。ですから課長にもならない若い担当者が行っても気軽に会ってくれました。

当時、生命保険会社はどちらも金融機関としては認められず、雑金と呼ばれていました。広島で早々にショックを受けたのは、野村證券の広島支店長が東京へ転勤するとき、広島経済界の大勢の方が駅に見送りに集まりました。しばらくあとに、わが社の岡山支社長が転勤するので取引企業の方が来るかと思って行くと、まったく見当たりません。社員だけの寂しいみおくりでしたが、支社長の転勤なんてこんなものですよという岡山支社の担当者の話にいささかショックを受けました。

赴任して間もない時でしたが、その時に支社長が転勤する時には、地元の代表的な企業の人たちが駅頭に見送りに来るように、会社の地位の強化を図る、を在任中の目標とすることに密かに決めました。特に、大都市・広島では、ぜひ実現したいと思いました。

当時、広島は、日本生命が強く市内に2つ支社があり、また住友は東洋工業、明治は、三菱重工、電機と、それぞれ系列を持ち地盤を固めていました。当方は、財閥系列の無い関東系の会社ですから、現地での知名度が薄かった。

したがって、東洋工業、中国電力、広島銀行などの地場大企業は、予算・決算の説明、借り入れ申し込みなど、何かあれば広島支社をとばして直接東京本社へ行きます。

さて、本社で、入社以来10年、証券会社の本部担当と毎日会い、銀行や企業からの証券関係の依頼を受ける窓口をしていたものとしては、大企業へ

の交渉はあまり難しいことではありませんでした。広島の大大会社に対して、本社へ行く前に、支社に寄って、支社長に説明してほしいと頼みました。株の依頼があれば、支社が申請し、広島で発注することを約束しました。

戦争で大きな痛手をうけた生命保険会社が、息を吹き返したのが昭和40年代半ばころから。資金量は小さく、最初に述べたように金融機関としては認められず、雑金融機関でした。したがって資金運用も細々で、銀行の保証つきの融資がもっぱらでした。直接担保を取って貸すための審査能力があまりなかったのです。

昭和36年に入社し配属された財務部有価証券係、午前中で仕事は終わり、などという日が週に半分くらいありました。当時、株価の動きを知るのは、証券会社の担当者からの電話だけ、株の売り買いもあまりしませんでした。

昭和40年代に入ると国債発行が始まり、高度成長時代に向かって、株、債券の取引が急激に増え、生命保険会社も有力な機関投資家と注目されるようになります。

職場も、昭和42年に株式と債券と係が二つに分かれ、債券の担当になりました。債券は、利回りが勝負です。数十億単位で売買するとして単価を出すのが大変です。例えば、クーポンレート（表面レート）5パーセント、残存期間が3年半の国債を年利2.55パーセントで10億円売却、あるいは購入するときの単価はいくらか、金額はいくらか。電卓もパソコンもない時代です。計算は大変でした。そういう厳しい商売は、証券会社の営業マンも、銀行の外回りもあまり経験しないと考え、証券関係に自信がありました。

その後も債権の売買はもっと複雑になっていきます。企業が一時的に短期資金を必要とした場合、債券を借りて売り、数日後に、買い戻して返すというようなことも、できるようになりました。

広島に戻ります。昭和51年2月、広島本社で中国地区一番だった、『スーパーいずみ』が、数か月後に上場を控えて、少しまとまった国債の買い入れをする、そして折を見て売り戻すという話があると、証券会社が持ち込んできました。急いだ話で、メインの証券も銀行も馴れておらず、当方に回ってきたのですが、そういう売買を経験してきたものには難しい話ではありませ

でしたから、即答で受けました。これ以降、ほとんど取引がなかった「スーパーいずみ」との縁が深まりました。親密先と後任者たちは大事にしたようですが、開拓者には一度もお礼がありません。東京へ転勤後、広島国税局の担当者が東京への出張のついでにと寄りました。前の担当者がやったことで、分からない。前任者は東京本社にいるからと教えられ訪ねてきたのですが、あの売買がどのように行われたか教えて欲しいというご下問でした。説明すると一応納得してかえりましたが、「いずみ」に報告すると、こちらで説明して終わっています、おかしいですね、という返事が返ってきたが、次の年についでにと寄ったのには、またまた驚きましたが、債券売買は、理解しにくいのかなと思ったりしました。

文化講座・講演会

成美会展（絵画・陶芸）

8月21日（火）～25日（土）

11時から18時（最終日16時）

大成建設・社員OB制作愛好の集

会場・サロンドジー

中央区銀座6-4-6 646ビル9階

電：03-3571-5837

奈良興福寺文化講座 2018年9月20日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

「中金堂を支える基礎—土木技術からみた興福寺—」

國學院大學准教授 青木 敬

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」

興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

第98回 新三木会 講演会のご案内

1、

2、日時・会場 2018年9月20日 13:00-15:00

如水会館 2F スター・ホール

2 『明治維新から150年、語り伝えたい事』

秦 郁彦氏 日本近現代史、軍事史研究家

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

Tel: 047-464-4063

フルネーム：一般・天地シニアネットワークと伝えてください

4、会費：2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会：15:15-14:20 千円（自由参加）

5. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

6 今後の予定

第99回 10月18日（木）『人工知能（AI）研究の現状とこれから』

杉山 将氏 理化学研究所革新知能統合研究センター長

東京大学大学院教授（新領域創成科学研究科）

第100回 11月15日（木）『歴史と現代』 仮題 一橋講堂

山内 昌之氏 東京大学名誉教授・武蔵野大学特任教授

事務局

<投稿歓迎><図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版（無料）を編集してプリント版を月に1回発行郵送しています。お申

込みくださればお送りします。

一応、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますが、
強制するものではありません。

<振込先>振込先：三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・477号

発行：2018年8月17日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-

1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651